

小川英次先生に想う

中京大学名誉教授 三 戸 公

小川英次先生と大学生活の何年かを共にし、今ここにこの一文を綴る御縁の有り難さを思っている。先生が学問の本道をまっすぐに歩まれ、経営学研究者としておそらくはその典型とも言うべき行蔵を、見事に納め、その業績を示し展開して来られた稀有の存在として、私に見える。そして、経営学の父 F. W. テイラーと重なって来る。

テイラーはハーバードを眼疾で中退し、作業の現場に入り、作業の科学を創立し、それを基礎にして工場管理の全体を科学的管理として構築し、それを〈対立からハーモニーへ〉と〈経験から科学へ〉の二命題からなるものとして言明し、更にその普及にコンサルタントとして献身する人生を歩んで〈経営学の父〉と呼ばれていること、周知の事実である。

小川先生が工学部を卒えて経済学部に入られたこと、そこにはテイラーのハーバード退学に通じるものがあるように思える。そして私も講義を聞いたこともある中小企業適正規模論の末松玄六先生の研究室に残り、以後生産管理論、中小企業論専攻の研究者の道を進まれる。その道は生産管理の現場、中小企業の実態・現実に着目して進み、そこから理論を組み立て、それをもって指導し、反省して深化、進化させて行く。その姿勢は、中小企業そして大企業さらに地域と国際化へと企業ならびに行政とも手をたずさえて進んで変わることが無かった。その拡大は同時に、生産管理そして経営の根幹をなす技術とは何かの問いを深めると同時に技術移転論へと具体化する。小川先生はなおも進んで、経営を構成する諸要素そして経営に関連する諸要素の調和とダイナミズムの“調律の経営”の提唱にまで行き着いておられる。これがテイラーの〈対立からハーモニーへ〉命題と軌を一にするものだと言うのは蛇足であろう。

その小川先生の名大退職後は是非本学へと少なからぬ大学が求めている困難の中を、「どうしても中京大学に」との梅村清弘理事長と経営学部設立の構想を進められていた方々の熱意と努力が稔ったときの夕食会があった。私もそのとき同席したが、人事にまつわる話などのないむしろ爽やかとも言える歓談のひとつときであった。私は、この席の人達の豊かな品性と奥行きを思わせられた。常人にして常人ならざりし梅村清明先生の余沢とも言えるであろうか。

経営学部が出来、つづいて大学院が出来たがそれに御尽力いただき、そのまま大学院研究科長として御自分の研究室から数人の博士を出すなどのことも含めて、大学院の完成までを担ってゆかれた。その間、折にふれ時に応じて話し合う機会をもったが、温和な性格・優れた研究・広く深い見識に接しうることとそのつど充足の感を深くした。

大学院の完成時まで長く席を置かせていただいた私が去った 2000 年に、先生はなられるべくして学長に中京大学の教職員は選んだ。私は中京大学のその後を広報紙を通してしか知らない。だが、梅村理事長と一緒に、毎年のように総合政策学部・情報理工学部など新しい学部・学科増設と旧学部の改組の記事が写真とともに報じられてきた。「私のいた頃中京大学の規模は全国第 5 位にまで大きく

なっていたと言われていたが今では」と研究事務室の方に聞いたら、「2000年の5位は同列に3大学あったが、2007年度は日大・東海大（14学部）と早大（13学部）法政（12学部）につづいて中京大と近大（11学部）で第5位」と教えられた。小川先生は規模の拡大と同時に、既存の学部そして新設の学部における研究と教育の充実そのあるべき姿に向って、力の限りしかもおだやかに尽くされたに違いない。

御苦勞様でした。ゆっくり休まれたら、先生のこれまでの現場・現実を見据えて理論を練り上げてゆく実事求是の姿勢から、この学長職2期の実践を通しての知見は、先生にこれから豊穰なる成果をもたらすであろう。先生の御加餐を願うや切なるものがある。